

## はじめに

私は何からできているか、という問いは幼い時から永遠に続くのではないか。幼い子の文学の『くまの子ウーフ』<sup>1)</sup>の主人公は、たまごを次々に産むめんどりはたまごでできてるのか？ おしっこを出す自分は「おしっこで できてるか??」と問う。

作家の大江健三郎は、子どものとき、自分の覚えた言葉は誰から教わったかを全て覚えていた、それを大江の母が家の子はそうなのだと誰かに話したことがある、と書かれたものを読んだことがある。子ども時代の大江は言葉を使うたびに、これは誰その言葉と自覚していたのだろうか。ウーフや大江のように、自分が何からできているかと問うことは、ルーツ探しに似ているのではないだろうか。

## 明治生まれのおば様たち

私は日常の生活や家事を明治生まれの祖母と祖母の姉妹であるおば様たちから教わったことが多いと思う。

子ども時代に祖母のところに逗留しに来ていた祖母の姉妹であるおば様たちと一緒に暮らした中で教えられたことが多々ある。洗い物をする時には、下水のその先の川や海のことを考えなさい、油は拭き取り、合成洗剤は薄めて使うと教えてくれたのは神戸のおば様。調理が終わった時には片付けも全て終わっていなければならない、油揚げやさつま揚げなどは必ず油抜きをする、古い小さなハンカチにもアイロンをかけて大切に使うなどは東京のおば様、というふうに。些細なことだが実行できなかった時には、おば様ごめんなさいと、今だに心の中で謝ってしまう。

子どもは母親から教わることが多いのではと思われるかもしれないが、昭和一桁後半生れの私の母の世代は、戦争と戦後の高度経済成長によってそれ以前の世代と断絶されたものがあると感じることがある。例えばお彼岸などにおはぎをこしらえる時は、小豆から煮てあんこを手作りするよりも、あんこまたはドライあんこを買った方が早くて合理的という考え方であった。さらにコンビニなどの行き渡った現代では、ただ買うものと思っている人も多いかもしれないが、その方面の先駆だったように思う。

「昭和のくらし博物館」を創った小泉和子さんのお母様は、明治生まれでスズさんという。その日常の家事を記録したドキュメンタリー映画『スズさん～昭和の家事と家族の物語』(大塚敦/監督 2021年)の中に、おはぎのシーンがある。とても懐かしく観ながら、私の祖母があんこをつくる時に、必ず同じお話をしてくれたのを思い出した。「新

米のお嫁さんがな、あんこを晒す時にいいとこ全部流してしもうてな、箆に小豆の豆カスしか残らなかったんよ」と。「それ、おばあちゃんのこと？」と何度聞こうと思ったか知れない。後年、自分が新米のお嫁さんになって、あんこをつくろうと思いたったときに、何のレシピもないのに、柔らかく煮た小豆を箆にとり、潰して、小豆の芯をボウルの水に溜めてさらし、上澄みの水をソロリと流し入れながら、木綿の袋であんこを濾す。覚えている祖母の手順通りにやって、晒しあんができたのだった。上澄みの水と一緒にあんこの素を流してしまいそうになる、その間違いやすいところを新米のお嫁さんの話にして祖母は伝えてくれていたのだ。祖母も育った家の台所で、同じ話を繰り返し聞かされて覚えたのではなかろうかと、思い至った。しかし、もっと昔の他の話も聞いておけば良かったと感じだしたのは祖母も父もいなくなってからである。

## ルーツ探し

私のルーツ探し<sup>ii</sup>のきっかけは、祖母のいところにあたる脚本家の橋田壽賀子が2021年4月4日に亡くなったことだった。その後もニュースが様々に流れる中で、2021年4月の朝日新聞（耕論）「橋田さんが遺したもの」の記事<sup>iii</sup>、さらに（耕論）に登場していたテレビドラマ研究者の宇佐美毅教授のブログ<sup>iv</sup>を読み、ここに自分の探したいものがあるのかもしれないと思いついた。

宇佐美教授は、耕論では以下のように述べている。

橋田ドラマがこれほど長く支持されたのは、昭和から平成にかけて、時代の雰囲気や価値観といったものに寄り添い続けたからだと思います。

「おしん」は努力と忍耐の物語ですが、これはバブル期以前の多くの日本人に共通した価値観でした。この物語が中東やアジアでも人気だったのには、自分たちも努力と忍耐で豊かになれるという夢を与えたからでしょう。（中略）

終戦直後の山形で聞いた話を「おしん」に生かしたように、自らの経験や、周囲の人たちの助言もドラマ作りに役立てたのでしょう。

また、宇佐美教授はブログの中で、以下のように述べている。

私はテレビドラマを考察するときに、「時代との関係」と「脚本家の個性」という二つの軸から考えるようにしています。橋田壽賀子ドラマには、その両面に強い特徴があり、考察の対象としては研究者としておおいに意欲をかきたてられる存在です。

橋田壽賀子の母のキクエさん（1890-1955）も、私の祖母カヲル（1907-1996）も、徳

島県板野郡藍住町の森本家<sup>vi</sup>が実家である。橋田壽賀子は有名人なので、残された記録はたくさんある。しかし、記録を残さなかった森本家出身のおば様方から仄聞したことを合わせて考えてみたいと思った。橋田壽賀子は、キクエさん 35 歳のとき、結婚 7 年目の 1925 年（大正 14 年）5 月 10 日に誕生したと書いてある。キクエさんは 28 歳まで森本家に居たことになる。祖母から、「スガちゃんおばさん（キクエさん）を好きだった」と聞いたことがある。10 歳頃まで同居している叔母さんだったのだろう。

親戚付き合いは皆無であったが、橋田壽賀子は日本経済新聞に連載した「私の履歴書」<sup>vi</sup>やエッセイなどにも母のキクエさんのことや子ども時代に森本家を訪ねたことを書いてある<sup>vii</sup>。

子どもの頃、母親の田舎だった徳島県の藍園村というところへよく行きました。藍を作っている村です。夏休みになると、いつも一人で行かされました。大阪の天保山から船に乗って、四国の何とかいう港で降ります。お迎えのおじさんと勘違いして、別の人の荷車に乗せてもらったことがありました。そのおじさんも、「ああ、わかった、わかった。藍園村ね。モリモトさんだね」と言って、連れて行ってくれました。

自伝等を読むうちに、その中に橋田壽賀子を「スガちゃん」と呼ぶ人たちがいたことを思い出し、もうこの世には、そう呼ぶ人は私の知る限り数人しかいないと気づいた。帰省した折に叔父宅を訪ねて、同じことを考えていた人が、その数人の中にいたと知った。神戸の親戚の池上さんは、コロナ規制のある中、淡路島を超えて藍住町までドライブしたのだという。連絡をとって、様々な思い出話を伺った。東京北区の親戚の山本さんにも電話してみた。

また、藍住町の森本家当主の森本文成さんを訪ねてみた。文成さんの父の清さんが祖母の兄だ。文成さんにお目にかかり、森本家の「考え方のくせ」のようなものがあるのかもしれないと感じた。自分は何からできているかとの、ルーツ探しの楽しさも感じることができるのではないかと。

## 「おしん」の故郷は？

森本多平（元の堀江家では與平、森本家代々の名を継いで多平）、フシ夫妻の長女はフジノさん、次女はカノさん、三女がキクエさん。長男の才助さんが後継ぎとなり、男子は四男までいた。

橋田壽賀子は、小学生のとき、東京戸越銀座に嫁いでいた小林カノさんのところに預けられたことがある。その後、大阪府堺市で女学校を出るまで母子で過ごしたのは、堺市に嫁いでいた伯母の駒井フジノさんの存在が大きかったと思われる。東京の日本女子

大に進んだのも、伯母の小林カノさんを頼る面があったようだ。

小林カノさんは、戸越銀座の商家に嫁ぎ、家業を継ぐ養子を迎え、戦後は養子の実家の山形に疎開していた。疎開時の事情は、新宮学（あらみや・まなぶ）氏の論文に詳しい<sup>viii</sup>。この山形での経験と見聞が、のちのテレビドラマ「おしん」につながっていると、橋田も書いている。

ここで、もし、カノさんが実家の徳島に疎開していたら、「おしん」の故郷は徳島だったかもしれない。しかし、森本家の当主であったカノさんの兄の才助さんは昭和19年に隠居届をだしており、家督を継いだ長男の清さんは、肥料問屋、森六の松山支配人として赴任していた<sup>ix</sup>。カノさんは徳島を頼ることはできなかったのだろう。

藍の産地であった藍住町には、森六や奥村商店といった藍商・肥料問屋の会社があり、各地に支店があった。「藍の栽培には大量の魚肥や油粕が要る。水運に恵まれた東京・深川には肥料問屋が軒を連ね、… 明治～大正の最盛期に36軒前後。うち伊勢の湯浅屋の支店は映画監督の小津安二郎の父親が仕切った」<sup>x</sup>らしい。山本のおば様の旦那様は肥料問屋に勤めており、家族で深川に住んでいたという。

山本のおば様の長男は、深川の小学校で砂糖問屋の息子だった大野晋と同級生で、首席を争う仲だったそうだ。しかし関東大震災があって、母子で徳島に避難したあと、北区滝野川に引っ越した。震災、戦災などのときは、女性のネットワークで疎開や避難をするのは、近年も見聞きする通りである。

山形から戻った橋田壽賀子は、山本さんから友人の大野晋を紹介してもらい、卒論指導を受け、さらに早稲田大学に進んだ。戸越銀座の小林カノさんのところに身を寄せていたころは、小林家の子どもたちは「スガ子ねえちゃん」と呼んでいたもので、時々訪れる山本のおば様の孫娘の方もそう呼んでいたそうである。

カノさんの夫の小林登馬さんが山形へ行くときに、橋田壽賀子とその従妹の「えっちゃん」を連れて行ったことは、新宮氏の論文の中に、西山町に居た方の証言として書かれている。「えっちゃん」が森本家のどの方の娘さんかは定かではない。このとき山形に一緒に行った「えっちゃん」は、のちに田中さんという方と結婚し、横浜市の鶴見に住んだ。田中さんは、作家の源氏鶏太の兄弟であった。

私が小学生のときに、小林カノさん、「えっちゃん」こと田中悦子さん、神戸の池上のおば様、東京の山本のおば様、そして山形県酒田市の女性（名前は不明）も連れ立って我が家に逗留されたことがあった。

そのときの思い出として、私は近所にお使いに行くように言われ、そのお使いの口上を覚えさせられそうになった。けれども繰り返し教えられる長い口上を覚えることができず、これはダメだと諦められたのだった。小林カノさんは先生をしたことがあったそうだが、小学生だった橋田壽賀子にもあのような口上を覚えさせたのだろうか。のちの橋田壽賀子の脚本はセリフが長いといわれたが、その源流ではないかとひそかに思っている。

小林カノさんには、私はその後中学生になるころまで、暑中見舞いと年賀状を差し上

げ、几帳面に返信をもらっていた。そのときの葉書の束を父が保管してくれていたのが手元にある。カノさんは、1974年7月24日荏原消印の葉書に、このように綴っている。  
(ママ・句読点はナシ)

…月日の立つのは早いものでお逢いしてからはや八年の年月が流れました 私も今年拾二月五日で八十五才の人生大学を卒業することになりました 東京へ来てからもう七拾年暮れましたが長いあひだの事とて苦ありらくありて苦勞の方が多かったですと思ひます 七拾年のあひだ里帰は2回帰り来たけれ共 今一度最後の里帰をいたしたいと思ひますけれ共 実現する事やは不可能だとあきらめて居ります…

## 権威への距離と自負と

橋田壽賀子には自伝的ドラマ作品があり、その一つがNHK朝の連続ドラマで、ユーミンの主題曲が印象深かった『春よ来い』である。テレビドラマは創作ではあるが、母親役を倍賞美津子、伯母役を渡辺美佐子、その夫役を片岡鶴太郎が演じていた。小林カノさんにあたる人を渡辺美佐子が演じたのを見たときは、テレビドラマというのはタイムカプセルのようだと思った。芸達者な俳優たちの演じる人の表情から心情までが観るものの心に残り、いつでも頭の中のテレビに映せるようになる。その元になる脚本の力とは。

橋田壽賀子は文化勲章も受賞したが、その前に文化功労者に選ばれた時のインタビューで、「自分が文化など背負っている気がしないのだけれど」と言っていた。これは40年も前から持論だったようだ。神戸の池上さんによれば、「ポートピア'81」を記念して、東京上野駅から、「文化」について語りながら神戸・ポートアイランドに至る講演列車「カルチャー・トレイン」が企画された。講師には手塚治虫氏らも居並ぶなか、池上さんも押したことにより橋田壽賀子は講師に選ばれた。その車中講座の中で橋田は、「作家の方とは違う脚本家であること」を強調していたそうだ。

後の著作の中でも、よく引き合いに出される向田邦子との違いについて、「向田さんは天才、自分は二流」と述べ、小説家の文章は読む人が限られるのに対し、「テレビドラマは、何倍もの人が観て」くれて、「おしん」の経験から、「ああ、脚本家でよかった。生きてきた意味がある」「視聴者のために書いてきた」と言っている<sup>vi</sup>。

脚本家の橋部敦子も向田との違いを論じるなかで、「自分は二流だ」というのは「自分を受容する力」の大きさだと評し、「亡くなって何十年たっても作品を論じられる向田邦子さんと異なり、橋田さんの作品は芸術性や作家性について論じられません。でも、自分は自分なんだ、とブレないシン…芯、心、信があった。もう、最強ですよ。」<sup>vii</sup>と述べている。また、説明的な長いセリフについても、脚本には本音が貫かれており、「言いたいことを言ってくれた」と共感を呼ぶのだという。

森本家の「考え方のくせ」のようなものがあるとすれば、権威への距離ではないかと思う。というのは、私の父も、幼いころ、商売が上手くいかなかった父母が県外に活路を求めたときに、祖母の実家である森本家に預けられたことがあり、その父の口癖は「偉そう」なことに対する反射的ともいえる態度だった。子どもが大人の目顔を読むことは、最も恥ずべき事とされていた。今の言葉なら、「空気を読む」「忖度する」などであろうか。

家の存続のための婿養子の家系のためか、女性も意見を言うのが当然だったのではないだろうか。1981年のドラマ『となりの芝生』のシナリオ出版された本<sup>xiii</sup>を読むと生き生きしている。夫や姑へ意見を言うと「口ごたえ」ととられる世間とは違う価値観があったと思われる。他の親戚にも可能な限り尋ねてみたい。宇佐美教授の言う「作家の個性」の考察につながるかもしれない。

## 郷土の知恵と文藝と

郷土史家・藍住町文化財保護審議会会長だった三好昭一郎氏は、「藍作地帯ぐらい働く百姓はいないと言われるほど高品質の藍を作るために働いた。肥料を買うだけでなく自ら工夫して良質な堆肥を作りました。研究心が非常に旺盛です」と述べている。<sup>xiv</sup>

新宮学氏の論文には、明治女性が主人公のモデルである「おしん」が世界中で好まれたことを書いてあるが、阿波の徳島藍住が藍商、肥料問屋を通じて江戸と、またその先のアジア、世界とつながっていたことがそのルーツにあるのではないかと想像の羽を伸ばしている。

森本文成さんのお姉様、京子さんの嫁がれた家の隣は、瀬戸内寂聴の実家の仏具店であった。少し飛躍するかもしれないが、脚本家や小説家の文藝と、徳島が阿波木偶（あわでこ）人形を産み、語りの芸でもある人形浄瑠璃が盛んであることと無縁ではないような気がする。

---

i 神沢利子/作 井上洋介/絵 ポプラ社 1969年

作者は、幼い子に向けて「ウーフはウーフでできている」という答えを用意している。

ii コロナ禍の影響があるのか、ルーツ探しを始める人が意外と多いようだ気がついた。生徒や学生は、祖父母に先祖のことをインタビューしたり、先祖と戦争との関わりから平和を考えたりすることが課題になり、それに家族をあげて取り組むことでルーツ調べが始まったりするようである。また、沖縄県立図書館の方に聞いた話では、アメリカでは趣味としてガーデニングに次いで人気があるのは、ルーツ探しなのだそうである。沖縄県は、ウチナンチュのアイデンティティのために、ルーツ探しへの協力に図書館の郷土資料担当が力を入れているそうである。

- 
- iii 朝日新聞 4月28日(水)朝刊(耕論)橋田さんが遺したもの「おしん・渡鬼 時代の共感」
- iv 2021-05-02 [朝日新聞に橋田壽賀子ドラマに関する記事 - フィクションのチカラ \(中央大学教授・宇佐美毅のブログ\) \(goo.ne.jp\)](#)  
<https://blog.goo.ne.jp/usamitakeshi/e/d33b9696470e209d53636aed97cb5f51>
- v 元は藍園村。昭和30年から藍住町。森本家は、赤穂浪士の討ち入りのころに向かいの徳善寺から分家。徳島藩へ年貢を納める役割を果たすため、男子の途切れるときは、婿養子をとって家を存続させてきたとは文成さんの談。墓は徳善寺でなく屋敷内にある。
- vi 日本経済新聞 2019年5月1日～5月31日に連載された「私の履歴書」(日経電子版)  
『人生ムダなことはひとつもなかった 私の履歴書』大和書房 2019年11月  
[CiNii Books - 人生ムダなことはひとつもなかった：私の履歴書](#) (内容説明、目次あり)
- vii 『安楽死で死なせて下さい』文藝新書 2017年7月  
<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB24234517?l=en>  
[CiNii Books - 安楽死で死なせて下さい](#) (内容説明、目次あり)
- viii 新宮学 終戦直後、西川町に疎開した橋田壽賀子 — ドラマ『おしん』のルーツを求めて —  
西川町 歴史文化学習会 西川町 2018年6月6日 <http://id.nii.ac.jp/1348/00004438/>
- ix 森本文成さんは昭和19年松山市萱町生れ。文成さんの姉の京子さんは、昭和6年東京市深川区万年町生れ。清さんは森六に勤めていたが、北区滝野川の山本家には、奥村という名の青年が下宿していたこともあるらしい。藍商、肥料問屋の繋がりがうかがえる。
- x 藍商の「転身」ヒット支えた：2018年10月3日 朝日新聞(夕刊)あのおときそれから
- xi 『安楽死で死なせて下さい』p66-67  
この点については、村野克明氏も、「謙遜というよりは、むしろ強い自負を感じる」と評された。
- xii 朝日新聞 4月28日(水)朝刊(耕論)橋田さんが遺したもの「受容力が生む本音ドラマ」
- xiii 『となりの芝生』中公文庫 1988年12月
- xiv 知恵働かせた伝統いまも：三好昭一郎 2018年10月3日 朝日新聞(夕刊)あのおときそれから